

Martin Luther : Leben und Werk

マルティン・ルター : その生涯と業績

99k1061 加藤享義

目次

1. Martin Luther の生涯	1
2. ルターの思想と宗教改革	15
3. ルターと聖書	22
4. 今日のルターに対する評価	30
・ドイツ語のまとめ	33
・参考文献	35

1. Martin Luther の生涯

両親の家庭と学校

Martin Luther (マルティン・ルター) は 1483 年、中部ドイツの Eisleben (アイスレーベン) で農民の子として生まれた。ルターの両親はもともと Thüringen (チューリンゲン) の Mehla (メーラ) 村で農業を営んでいたが、父・Hans (ハンス) と母・Margarethe (マルガレーテ) は他の土地で生計をたてるためにアイスレーベンへ移った。そこで子供が生まれ、翌日生家のすぐ近くの St.Petri-Pauli-Kirch (聖ペテロ教会) で洗礼を受けさせ、その日の聖者 St.Martinus (マルティヌス) の名に因んでマルティンと名付けられた。この人物こそ、これから取り上げるマルティン・ルターである。だが父・ハンスの仕事はうまくいかず、一家はマルティンが生まれて間もなく小さな炭鉱都市であった Mansfeld (マンスフェルト) に移り、父はそこで鉱夫となった。父は勤勉と節約によって次第に富を蓄え、小さな企業家となり町の有力者にまでなった。一家は経済的には裕福で生活面での貧しさは経験しなかった。

ルターは 1488 年にマンスフェルトの Latein (ラテン) 語学校に入学し、1497 年に Magdeburg (マグデブルク) のラテン語学校に移った。1498 年からの 4 年間は Eisenach (アイゼナッハ) の St.Georg (聖ゲオルク) 教区学校でよき教師と名家の温かい愛情に包まれてのびのびと過ごし、よき情操教育を受けた。1501

年、ルターは当時ドイツの諸大学の中でも評判の高かった Erfurt (エルフルト) 大学へ入学し、そこで一般教養課程としての7科目、文法学、弁証学、修辞学、幾何学、天文学、地理学、音楽を学び始めた。また彼は厳格な学寮に寄宿し、毎日の勉強や宗教的訓練に専念した。その結果 1502 年には学士となり、1505 年 1 月には修士の学位を受け、神学、医学、法学の中から法学を専攻してエルフルト大学法学部にて法律学の勉強を始めた。

恵みの神を求めて

ところが思いもかけない出来事が彼の身に起こる。一時マンスフェルトに帰省していたルターは 1505 年 7 月、エルフルトへ戻る途中で突然落雷にあい地面に叩きつけられた。死の恐怖におののいた彼は炭鉱労働者の守護聖女 St. Anna (アナン) に助けを求め修道士になることを誓い、エルフルトにある Augustiner-Eremiten (アウグスティヌス陰修士会修道院) に入ったのである。この唐突とも思われるルターの修道院入りの動機を解明することは非常に困難で、今日でも多くの議論がなされている。その後 1 年間の見習い期間を経て、1506 年の秋に正式な修道士として認められその勤めに没頭した。1507 年には司祭に叙任され Messe (ミサ) を執行するようになるのだが、この頃からルターの心には従来の神学に対する疑問が強まるようになり、修道院生活も決して心の安らぎの場所ではなくなったのである。こうして彼の心の中に宗教と神学への危機

感が芽生え、恵みの神を求めての精神的苦悶が始まるのであった。

1508年、ルターは Wittenberg (ヴィッテンベルク) 大学に招かれ道徳哲学を講じることになった。ヴィッテンベルク大学は 1502 年に Sachsen (ザクセン) 選帝侯 Friedrich (フリードリッヒ) によって創設されたばかりで、ドイツで一流といわれたエルフルト大学や Leipzig (ライプツィヒ) 大学に匹敵する大学を築き上げることを目標にしており、その創設にはアウグスティヌス陰修士会も関与していた。ルターを推薦したのはアウグスティヌス陰修士会のザクセン管区長 J・Staupitz (シュタウピッツ) で、その後ルターとシュタウピッツは個人的な接触を持つようになる。ルターは自分の罪と苦悩をシュタウピッツに打ち明けた。その度にシュタウピッツは温かい心を持ってルターの悩みを聞き、できる限りの助言を与えた。ルターは生涯よき師、よき友人シュタウピッツとの出会いを喜び、その助言に感謝しつづけた。

塔の体験

1509年、ルターはエルフルト大学で神学士となり、1512年5月までにはヴィッテンベルクへ移り、ヴィッテンベルク修道院副委員長となって修道士たちの研究活動に責任を負うとともに神学博士になるための研究を行った。10月には神学教授資格を与えられ、続いて神学博士の学位を贈られヴィッテンベルク大学神学部教授として聖書講義をすることになった。彼は終生その職に留まる

ことになるのだが、この聖書学教授としての活動によって宗教改革的体験がなされていくのである。聖書研究はルターの思想に画期的な転換点をもたらし、宗教改革の原点とも言うべき「新たな義の理解」と呼ばれる福音の再発見を成し得たのである。この「新たな義の理解」はルターが修道院の塔の書斎の中で激しい精神的苦悶の末に獲得されたもので、一般に「塔の体験」と呼ばれる。

1515年、ルターはアウグスティヌス陰修士会の管区長代理に任命された。このことは新たに10の修道院の責任者になることを意味しており、今や彼は11の修道院の責任者、修道院の説教者、大学教授などであり、その生活は多忙を極めた。ルターは「新たな義の理解」が信仰にとっていかに画期的な意味を持つかをまだ十分に自覚していなかった。ところが思いもかけない事態の進行がその革新性を明らかにする。それは当時教会より売り出されていた贖宥券の問題であった。

贖宥券事件

1517年、ルターは「贖宥券の効力についての討論」と題する『95カ条の提題』をヴィッテンベルクの城教会の扉に掲示し、宗教改革の発端とも言うべき事件が起こる。贖宥とは本来、煉獄へ行くことが前もって定まっている者が自ら苦行し、犠牲を払うことによって罪の償いの負担が軽減されることを保障する教会の働きを意味していた。しかし16世紀のはじめ、財政困難に陥った Rom

(ローマ)教会はローマにある Petersdom (聖ペテロ大聖堂)の増改築を理由に贖宥券の販売を始め、その利益を得ようとした。その結果、贖宥券は商品のよ
うに流通し、やがてその弊害も顕著に見られるようになった。信者の間には罪
そのものを恐れず、罪の罰を贖宥券によって逃れようとする傾向が強くなって
いた。「新たな義の理解」を獲得したルターにとって贖宥券の乱売は信仰にとっ
て極めて危険なものと思われ、贖宥券について疑問に思う事項をまとめ、贖宥
の効力を明らかにするための学問的な討論を願って『95カ条の提題』を掲げた
のである。この提題はあくまでも神学者の討論向けのものであったが、たちま
ち全ドイツ中に広まり大きな反響を呼んだ。しかし『提題』の掲示は直ちに宗
教改革運動の勃発を意味するものではない。なぜなら当時ルターはまだ教皇と
教会の権威そのものを否定しようとは考えておらず、贖宥そのものも否認して
いなかったからである。

贖宥券論争はさらに進展し、ローマ教皇庁では異端の疑いでルターの審問
が開始された。また皇帝はルターの主張に立腹し、教皇にルターの活動を停止
させるように要求した。教皇側は枢機卿 Cajetan (カエタヌス)にルターを異端
の嫌疑で処理する権限を与えた。ルターの運命は直接の君主、フリードリッヒ
選帝侯の態度にかかっていたが、選帝侯はルターを処分することによって創設
したばかりのヴィッテンベルク大学の信用を失うことを恐れカエタヌスと交渉

し、ルターに弁明の機会を与えるように要求した。選帝侯は熱心な Katholik (カトリック) 信者でもあり、表面的にはルターに味方しなかったが常にルターを保護したのである。こうして 1518 年の Augsburg (アウグスブルク) 帝国議会でルターは異端の疑いで審問された。カエタヌスはルターの自説に対して撤回を要求したが、結果はルターによるローマ教会批判が明確になっただけであった。

ローマとの対決

ルターの改革者としての歩みにとって 1519 年のライプツィヒ神学論争は重要である。このときルターは自説の弁明をするとともに聖書の権威と教会、信仰と行為などについて「教会は今や改革を必要としている」という改革者としての見解と行動を前進させたのである。他方ローマ教会側は、教会の反逆者として Konstanz (コンスタンツ) の公会議で異端の宣告を受けた J・Huss (フス) の主張をルターが支持したことを指摘し、ルターを異端審問にかける根拠をつかむことができた。この討論会ではルターの反教皇的立場が明らかになり、ローマ教会との和解が不可能なことを決定的に示した。こうしてルターは急速に宗教改革を目指す指導者の旗頭となったのである。

ライプツィヒでの討論後、ルターは教皇制と教会体制に対してますます疑念を深め、宗教改革の必要性を認識するようになった。そして聖書と教会史の研究に没頭し、いくつかの優れた著書が残された。また神学的問題、教会の実

際の問題、政治的・社会的問題について最も多様に改革の原理と実際を論じ、活動した時期でもあった。『ドイツの Christ（キリスト）者貴族に与える書』はドイツ国民の経済上、政治上、教育上の現実の苦情を代弁し、個々の問題について具体的な改革案を示したものであるが、それに先立ってローマ教会の権力を支えている 3 つの原理を鋭く批判している。それゆえ宗教改革期における最初の神学・政治論といえよう。『教会の Babylon（バビロン）捕囚』は表面的には扇動的な調子で書かれていない。しかしローマ教会の根本的教理である礼典論を否定し、洗礼、悔悛、聖餐の 3 つを主張した。それは従来教会制度の崩壊を意味しており、当時の神学者たちはこの書を極めて危険な書と評価した。

『キリスト者の自由』ではキリスト者とは何であるかという問題を提起し、信仰によって義とされるものが同時に隣人に対する奉仕において生きることをキリスト者の自由と説いた。この書の中でルターは心の奥底から溢れ出る彼の信仰を告白し、現実の状況とは無関係に福音主義の神髄を明らかにしている。それゆえ当時におけるルターの信仰を最もよく示すものであり、その格調の高さから言っても最も優れた作品といえよう。これら 3 つの書物は一般に「宗教改革の三大文書」と呼ばれ、ルターの福音主義の立場をよく示すものである。

1520 年、教皇庁はルターのこれまでの主張の中で異端と思われる 41 のものを取り出し、今後一切の陳述を許さないが自己の誤りを認めるために 60 日間の

猶予を与えることになった。そして教皇 Leo（レオ10世）はルターに破門威嚇の大教書を発した。この勅書は決定的な制裁を意味していなかったが、もしルターが教会に服従しなければ制裁を加えるという内容であった。破門威嚇の大教書を受け取ったルターはそれを読み、この教書は彼にとって不敬虔、偽善、無知に溢れるものであり教皇を反キリストだと確信するにいたった。そしてヴィッテンベルクの広場にて教授や学生たちの前で破門威嚇書を教会法令集などとともに火に投じて自己の立場を明らかにし、ドイツ国民に宗教改革の決意を公然と示したのである。このことによって宗教改革運動は広い国民的基盤の上に結集され、進展することになった。

1521年1月、ルターに対する正式な破門状が発せられた。次いで開かれた Worms（ヴォルムス）国会でルターは自説を取り消さないと処刑される可能性が高かったが、神聖ローマ皇帝 Karl（カール5世）と並居る諸侯の面前でその主張の撤回要求を拒んでこう言った、「私は人間であって神ではない。自分の意見がもし間違っているならどんなものでも進んで撤回し、私自身が自分の著作を火に投じよう。撤回することはできる。しかし、良心に反して何かを行うことはおだやかでないしまた勤められるべきことでもない。聖書の証言と明白な根拠によって論破されない限り、自分は断じて撤回しない」と。最後の一句は「我ここに立つ、これ以外になしえない。神よ、我を助けたまえ、アーメン」

と言いなおされて今日広く知られている。この瞬間こそルターの生涯において絶頂のときであり、多くのドイツ国民から支持を受けた。ヴォルムス国会はルターに異端を宣告し、帝国追放刑に処して幕を閉じた。

ヴァルトブルク城にて

ヴォルムス勅令が発布され、その帰り道、もはや法律の保護を失っていたルターの身が危険にさらされることは明らかであった。そこで1521年5月、ルターは領主であるフリードリッヒ選帝侯によって Wartburg (ヴァルトブルク) 城へ連れ去られ、そこで貴族 Jörg (イェルク) という名前にかくまわれ、保護されたのである。ヴァルトブルク城での生活は福音を伝える任務を持つルターにとってあまりにもものどかで静かすぎた。ルターは最初何をしても空虚で寂しさを逃れることはできなかったが、神に対する確固たる信仰を持ってこの苦難に耐え、仕事の中に慰めを見出したのであった。ヴァルトブルク城におけるルターの著作活動において重要なのは、『教会暦による説教』と新約聖書のドイツ語訳である。前者は福音主義的説教の模範として広く流布し、福音主義教会建設の基礎となった。また後者は、人々にルターの改革運動の目的と意義を明らかにし、彼らの心にキリスト教の真の信仰を芽生えさせるのに役立った。それだけではなく、ルターの聖書のドイツ語訳は近代ドイツ語の基礎となり、その後数世紀にわたって近代ドイツ語の形成と精神文化の領域とに測りしえない影

響を及ぼした。

宗教改革運動の進展

宗教改革運動そのものはルターの不在中にザクセン、チューリンゲン地方、南・北ドイツ、Österreich(オーストリア)、Niederlande(オランダ)、Schweiz(スイス)などへ普及していった。ヴィッテンベルクではルターの同調者たちが現実面での具体的な改革運動を急激に推し進めた。彼らは福音主義の立場に基づいて修道院の解散、司祭の生活、礼拝などを改革し、聖徒たちの絵画や彫刻などを取り外すことに着手した。しかし、まもなくこれらの改革運動は急進的なKarlstadt(カールシュタット)の指導によって暴動化するに至った。このような状況の中、ルターは自らヴァルトブルク城を去ることを決意し、1522年にヴィッテンベルクへ帰還して熱狂主義者と画像などの破壊に反対して忍耐と博愛についての説教をし、人々の動揺を静めヴィッテンベルクに秩序を取り戻した。ヴィッテンベルクへの帰還とともに、ルターは自らの福音主義教会の形成に取り掛かることになった。しかしその帰還の年は聖書の翻訳と百篇以上の説教とにその活動は終始している。そのような夥しい数の説教の後にはじめてルターは教会論、礼拝論、俗権論、を公にし、神のみ言葉による教会の形成を説いて、神のみ言葉の布教こそキリスト教会がどこにあるのかの標識だと述べている。この考え方はその後のルターにおいても変わっていない。そして教会の中心的

営みである礼拝の改革、特に当時の一般民衆にとって礼拝の中心であったミサ改革に力を入れた。その結果、わずかな部分を除いて礼拝の全てをドイツ語で行ない、ルターの自作を含めたドイツ語の賛美歌による福音主義的礼拝が行なわれることになったのである。

ドイツ農民戦争

ドイツ農民戦争は16世紀になって突然勃発した大衆運動ではなく、14世紀後半から各地で起こった一連の農民一揆の流れを汲むものである。農民一揆は当初においては、昔からの生活が領主によって脅かされることに反発し、古い権利の回復を要求するものであった。しかし15世紀になると強力な領邦国家の形成とともに一揆も険悪な姿をとり始め、神の掟に基づいて現在の状態をくつがえそうとする革命的傾向を持つようになった。そしてまもなくルターが『95カ条の提題』を持ってドイツ史に登場し、ローマ教会、すなわち既成秩序の全体に対して攻撃を加えると、それに不満を抱いていたあらゆる人々を巻き込み、農民一揆は宗教改革運動と結びついて農民戦争という大規模な運動として展開しはじめたのである。農民戦争の中核を担ったのは手工業の発達によって生活が上昇した比較的裕福な農民層で、彼らは自分たちの不明確な地位に不満を持っていた。領主側は農民への圧迫を反動的に強化し、この対立が農民戦争となったのである。ドイツ農民戦争は宗教改革の影響により、宗教的外観を持った

けれども本質的には政治的・社会的運動だった。

1525年、全 Schwaben(シュヴァーベン)の農民の要求をまとめた『十二条の要求』が発表された。この要求は各地の農民の要求を列記しただけでなく、個々の要求に聖書の言葉を引用して、その要求の正当性を神学者に問うという福音主義的傾向を含んでいた。しかしそれはルターにとって自然法の見地からすれば正当で公正なものであるが、キリスト教の精神とはなんら関係のないものであった。まもなくシュヴァーベンの農民は蜂起し、城、教会、修道院などを襲い、略奪や放火をして暴徒化しはじめた。この暴動はまたたくうちに各地へ波及し、農民は暴徒として荒れ狂うようになった。ルターは『農民の殺人・強盗に抗して』という著書のなかで、農民が統治権力に反抗し、略奪や殺害をなしていることを激しく非難し、領主側が即座に剣を取って鎮圧すべきだと主張した。この著書は、農民が諸侯によって過酷な弾圧をされ、虐殺された時期に出版されたために大きな誤解を受けることになった。カトリック諸侯はルターが自らの責任を逃れようとする政治的配慮からこの文書を書いたと非難し、他方農民たちはルターに許すことのできない裏切り行為を見出したのである。

農民戦争はルターにとってその名声を危うくするものであった。ルターは農民戦争を彼の特異な神学的国家観から捉えており、基本的にはまず第一に福音の純粹性を守り通すこと考え、そのために積極的に行動し、発言したと考え

られる。しかしそのことが結果的には広範な農民層の支持を失い、またルター自身も民衆への信頼を失ったということは彼の生涯におけるひとつの悲劇とみなすことができる。農民戦争によって誰よりも深く傷ついたルターは、この事件以来、政治的改革や社会的改革について説教することも少なくなった。

結婚

ルターが農民戦争の挫折と孤独から立ち直るきっかけとなったのが結婚であった。1525年、ルターは Katherine von Bora (カタリナ・フォン・ボラ) と結婚し、その後全部で6人の子供に恵まれた。その頃ルターは修道女の脱走を手伝い、彼女たちに良人が職業を探してやっていた。カタリナ・フォン・ボラもそうした修道女の一人であった。当時、修道僧と修道女が結婚するということはまったく驚くべきことで、それだけにルターには多くの嘲笑と非難が投げつけられた。ルターの家は経済的にはあまり豊かではなかったが、その気前のよさと太っ腹から貧乏学生や助けを求める人々を家に置き、また常に数人の者が出入りしていたのでいつも大家族だった。

アウグスブルク帝国議会

1530年のアウグスブルク帝国議会そのものはドイツ宗教改革史に属するものであって、ルターの歴史の一部と見なすことはできない。なぜなら帝国追放刑を処せられたルターはアウグスブルクに赴くことができず、選帝侯領内の最

南端にある Coburg (コープルク) 城に滞在してただ遠方から間接的に参加したに過ぎないからである。しかしこの国会とルター、とりわけルターが巻き起こした宗教改革運動との関係性において重要である。この国会では福音主義者のとるべき態度をそれまでのように個人ではなく教会が告白した。そのため、この時ルター派教会が誕生したとすることができる。カトリックの穏健派との和解を目指す立場から作成された『アウグスブルクの信仰告白書』は皇帝に認められず、あらゆる種類の教会の改革は禁止され、ルターの帝国追放刑が再確認された。さらに神聖ローマ皇帝カール 5 世とカトリック諸侯は同盟を結び、福音主義の諸身分との対立は極めて切迫したものとなった。こうした事情を背景に 1531 年、福音主義の諸侯はカトリック側に対抗するために Schmalkalden (シュマルカルデン) に集まり、相互の防衛と協力を誓いザクセン選帝侯と Hessen (ヘッセン) の Philipp (フィリップ) 方伯を盟主としてシュマルカルデン同盟を結成した。この同盟には最初、7 諸侯と 11 の自由都市が参加したが、その勢力は次第に広がり強力になっていった。このように宗教改革運動の主導権は次第に諸侯や自由都市の手に渡るようになり、ルターは依然として宗教改革の精神的指導者ではあったが、もはや改革運動の旗頭ではなくなっていたのである。

晩年

ルターは晩年に多くの苦悩を忍ばなければならなかった。彼はしばしば病

気に苦しめられ、次第に短期で気難しくなり、時々ひどい痲癢を起こすようになった。長年にわたるローマ教会との戦いと苦勞が彼を頑固でかたくなな人間にしたのかもしれない。1546年、胸の圧迫感を訴え始めたルターは息苦しさに耐えかねてそばにいた人を呼び、死の近いことを告げた。そして息子たちや友人の見守る中で祈りを繰り返した後、その生地アイスレーベンにて静かに息を引き取った。ルターの生涯は真の信仰を求めての絶えざる戦いであった。

2. ルターの思想と宗教改革

ルターの宗教改革が持つ意義

宗教改革の発端をルターのみを求めることは正しくない。しかしルターが当時の社会に大きな反響を及ぼし、その引き金としての役割を果たしたことは事実である。宗教改革運動は全 Europa（ヨーロッパ）に広がり、抗議者の群れは「Protestant（プロテスタント）」として新しい教会の流れを形成することになり、他方カトリックは自己刷新に努めながら今日に至っている。

そもそも宗教改革の本来的意図とは何であったのか。ルターは中世キリスト教の墮落に憤慨してローマ教会を否定したのではない。ルターの改革思想の原点ともいべきものはあくまでも彼自身の極めて個人的な救いの問題であった。彼は救いの本質とその条件を見出そうとしてそれを追求した結果、「魂の救いは善行によらず、キリストの福音への信仰のみ」という一般に福音の再発見

と呼ばれる「新たな義の理解」を獲得した。ルターが福音の再発見の後に教会を見つめたとき、そこに多くの矛盾するものを見出した。ルターは中世キリスト教会のこのような欠陥が福音を不純化するに留まらず、教会の腐敗とあいまって真の信仰そのものを奪っていることを見抜いたのである。ルターがその矛盾を指摘し、真の信仰を説きはじめたとき、カトリック教会との衝突は避けられないものとなった。決して宗教批判家ルターがこの福音を発見したのではなく、新しい福音理解が彼を宗教改革へと駆り立てたのである。この新しい福音理解こそルターの改革思想の中核をなすものである。彼は自己を第一に聖書の注解者と考え、その遂行に使命を見出していた。

しかしルターの第一の関心は福音の純粋な把握にあり、人間性の肯定や解放ではなかった。それは神を重んじ、人間の罪を徹底的に強調する神中心主義であった。だがルターの思想は人間の内面的変革を真剣に問題とすることによって、結果的には近代の新しい人間性を生み出すきっかけを含んでいた。

宗教改革はもともとキリストの福音を純粋に捉えようとする宗教運動であったが、当時のカトリック教会が社会秩序の基本構造と密接に関係していたことから必然的に社会運動として結びつくことになったのである。ルターの思想は教皇や皇帝に対立していた諸侯に支持され、やがて彼は宗教改革運動の強力な指導者となり、全ヨーロッパに信仰的、思想的、社会的な革命の嵐を巻き起

こしたのである。しかしそれはドイツの悲劇の発端でもあった。各地で急進的に起こる宗教改革運動や農民戦争のなかで彼の考え方は諸侯たちの権力政治の道具として利用され、ドイツの歴史はとめどない権力抗争と分裂の道をたどっていく。

宗教改革的思想の形成

ではルターを「新たな義の理解」という宗教改革的思想へ導いた背景とはどのようなものであったのか。この問題を解明するにはルターの思想形成期における環境と、そこで彼がどのような思想と接触し、その影響をどういうふうにしたのかを明らかにしなくてはならない。

現代のルター研究は、彼の育った家庭や学校教育がルターの神学形成や将来の改革者となるに際して決定的な役割を果たさなかったことを明らかにしている。ルターの両親の家庭を支配する宗教的雰囲気は、誠実にして純真な敬虔であり、そこには中世末期からの悪魔や魔女信仰も混入されたものであったが、それは当時においては当たり前のものであって世の常と異なるものは全く見られなかった。つまり両親の家に教会的・宗教的な面において当時の観点からすれば「進歩的」と思われるような精神があって、それが息子の成長に特別な影響を及ぼした、とはとうてい考えられない。マグデブルクの学校は信仰の改新と修道院の改革を唱えていた「兄弟生活兄弟団」と呼ばれる宗教団体によって

運営されていた。そこで培われたものは温かな心情の敬虔と聖書に個人的に親しむということであった。ルターはこの兄弟団の持つ温かい内面的な敬虔にある愛着を抱き、それを生涯持ち続けた。ルターはエルフルト大学へ入学して Occamismus (オッカム主義) と接し、その影響を受けた。ルターの時代は今日とは違ってまだ神学と哲学とが緊密に結びついていた時代であった。オッカム主義は信仰と理性、神学と哲学とを鋭く区別し、神の主権の自由を強調して「救いは神が選んだ人に与えられる」と説くと同時に、他面では人間の自由意志を認め「人は善きわざによって救いに預かることができる」と主張していた。若きルターはオッカム主義に共鳴し、その大学生活中、人文主義の教育にも触れているがオッカム主義にしても人文主義にしても彼の神学的母体となるようなものにはならなかった。

ルターの思想的基盤を明らかにするとき、まず最初に注目されるのは彼が精神的破局へ陥り、苦悶した場所であるアウグスティヌス陰修士会修道院の特殊性である。この修道院はドイツ・アウグスティヌス陰修士会の中でも厳格派に属し、そこではアウグスティヌスが尊敬されるとともに神学研究、特にオッカム主義が盛んで聖書研究が義務づけられていた。ルターは教会がアウグスティヌスより継承してきた予定説を理解することができなかった。予定説とは「神は前もってある者に救いを定め、ある者を滅びに任せるということを決定して

いる」という思想である。ルターはオッカム主義とアウグスティヌスの教説を学び、善きわざを行い、修道院の規則を厳格に守ることによって心の安らぎに到達しようとしたが、逆に自己の中に矛盾を見出し、精神的破局に陥ったのである。

ルターをこの精神的破局から救い出したのはヴィッテンベルクにおける彼の活動である。ルターはシュタウピッツを通してドイツ神秘主義に接した。ドイツ神秘主義とは、元来神と人との直接的結合によって信仰の純粹化をはかろうとするもので、「救いは修道院だけでなく、その他の場所でも見出せる」と主張し、汎神論的傾向を強く持っていた。カトリックの立場を抜け出すことができなかったシュタウピッツの助けは、真の信仰を求め続けるルターにとって、結局一時の安らぎしか与えることはできなかったが、ルターはドイツ神秘主義から善きわざは人間を虚栄と自己満足に導くこと、人間は謙虚になって神に全ての栄光を帰すべきことなどを学び新生への道を進んだのである。そして聖書研究を通し「塔の体験」がなされ、「新たな義の理解」と呼ばれる福音の再発見をしてルターの宗教改革の原点ともいうべき思想を形成させたのである。

この「塔の体験」がいつ起こったかについては様々な見解があり、その時期を断定することは難しいが、「ローマ書講義」とりわけパウロ研究が彼の神学的発展に決定的な役割を果たしたことはどの研究者も認めている。ルターは Paul

(パウロ)の「ローマ人への手紙」の第一章十七節、「神の義はその福音の中に啓示され」という言葉を熟考した結果、神の義とは神が恩恵と哀れみによって人間を義とすることだと確信するにいたった。そして第三章二十八節の「人が義とされるのは法律の行いによってではなく、信仰によるのである」という言葉の中にその定義を見出した。こうしてルターは宗教改革の原点とも言うべき新しいキリスト観と神についての考え方を持つようになったのである。ルターが教授活動を終えるまでの30年以上にわたる聖書講義と説教活動が彼を改革者として支え、その教会を形成するに至った力の源泉であった。

宗教改革が起こった背景

16世紀初頭にドイツで宗教改革が起こり得たのは単にルターの改革思想が偉大であったという理由だけではない。ルターの「新たな義の理解」が宗教改革運動へと発展することを促進した諸原因としては、当時のヨーロッパ諸国の国際的・政治的情勢があげられる。当時ドイツはまだ国民国家を形成できず、依然として封建的分裂が続いていた。他面、ローマ教皇は教会国家の支配者として国際政治や世俗生活にまで関与し、ドイツから多くの財貨を搾取していた。このような状況の中で、一方では地中海貿易や商業、金融によって莫大な富を得た新興商人階級が活躍し、ヨーロッパの経済や政治を支配し、左右するようになっていた。他方では商業の展開につれて上昇してきた農民層の力は、現実

の教会的・封建的体制に対する不満ないし批判を一揆によって爆発させ、宗教運動は社会改革運動と結びついた。新聖ローマ皇帝カール5世は、Osmanisches Reich(オスマン・トルコ)のヨーロッパへの積極的な攻撃に対して常に守勢の立場にあり、ドイツで起こった宗教改革に干渉する余裕を持っていなかった。このようなドイツの社会的情勢が宗教改革を可能にした大きな原因であった。

またルターが『95カの提題』を発表した時期はちょうど皇帝選挙を目前に控えている時期でもあった。神聖ローマ皇帝に誰が選ばれるかは重大な政治問題であり、ローマ教皇庁もローマの利害という点から皇帝選挙に深い関心を示していた。そのため教皇庁はルターを許すつもりは全くなかったが、ルターは皇帝選挙権を持つフリードリッヒ選帝侯に保護されていたので強引に処罰されることはなかった。このような政治情勢こそルターが『提題』を発表して以来、ほぼ4年間も処罰されることなく宗教改革の指導者として活躍できた大きな原因のひとつでもある。

次に宗教改革の精神的原因としてローマ教会に対する不満が挙げられる。一般に宗教改革の原因はローマ教会の墮落によるものといわれる。確かに当時のローマ教会は世俗化し、著しく墮落していたが、宗教改革直前のドイツでは依然として教会の道徳的権威は微動だにしておらず、熱烈な宗教的関心が支配していた。このような傾向から宗教改革の精神的原因には二つの異なる領域が

あると考えられる。一つは社会現象及び法律制度としての教会に対する批判である。すなわちローマ教皇庁の中央集権化に対する、購宥券に対する、聖職者の退廃に対する憤慨である。この批判は極めて強く一般受けしたが、政治手段で無力化される肅正運動以上のものにはなりえなかった。他の一つは救済施設としての教会に対する宗教的批判である。この批判は様々の神秘主義的信仰から由来するものであり、教会の精神的根源を揺り動かすものであった。しかしこの批判には外面的活動性が欠けていた。ルターの偉大さは、この異なる二つの領域の批判を合致したことであった。ルターはこの二つの批判を含有していたからこそ宗教改革運動の中心的人物として活動できたのである。

3. ルターと聖書

コミュニケーション事情

16世紀初めのドイツ語は宗教改革と農民戦争という対立抗争のなかで特別な役割を果たし、ドイツにおける Kommunikation(コミュニケーション)事情が根本的に変化した時代であった。ルターの聖書ドイツ語訳が近代ドイツ語の形成と精神文化の領域とに大きな影響を及ぼしたことは先にも触れたが、ここでは宗教改革という側面を離れ、もう少し詳しくルターとドイツ語の歴史についての関連性を述べることにする。

現代の標準語の歴史はごく要約すればルターに始まると言うことができる。

しかし彼の用いた言語は飛躍的に過去と切り離され、急に現代のそれに接近したわけではないし、まだ現代の標準語とはかなり異なった要素を持っていた。言語は時間的に、空間的に、社会的に変化するものであって、なぜルターが現代標準語史の出発点とされるのか理解するためには、必然的にその歴史を知ることが重要である。

現代ドイツ語の起源を Germanisch (ゲルマン語) に求めることができるのは周知のごとくである。ゲルマン諸族はほぼ3~5世紀の間に東海を中心とする北ヨーロッパから南方、及び東南方を目指して民族大移動を開始する。東南方へ進出した諸族(東ゲルマン)、南下して Rhein (ライン川) を遠く離れた諸族は遅かれ早かれ政治の舞台から姿を消す。後にドイツを構成する主要な役割を果たしたのが、東南部 Donau (ドナウ川) 沿岸に入った Baiern (バイエルン)、ドナウ川源流からライン川上流~流域に入った Alemannen (アレマン)、ライン川中下流域を本拠とする Franken (フランク)、そして北ドイツ中央の平原を占めるザクセンの4族であった。当然この頃すでにある程度の方言分化は行われていたと考えることができ、南部のアレマン語とバイエルン語には音韻推移が確認されている。音韻推移という現象は、個々の領邦方言ならびにそれから発達した地域の共通文語によって、その進展の仕方はそれぞれに異なっていた。こうして音韻推移が完全に、ないしは部分的に行き渡っていた上部ドイツ語と

中部ドイツ語地域は、音韻推移と全く関係のなかった低地ドイツ語地域と区別され、高地ドイツ語地域といわれるようになった。

上部ドイツ語、中部ドイツ語、低地ドイツ語は概略、次のように分類される。
上部ドイツ語（音韻推移の影響を強く受けた）

- ・アレマン語（シュヴァーベン語を含む）
- ・バイエルン語
- ・上部ドイツのフランケン語 { Würzburg (ヴュルツブルク) Bamberg (バンベルク) Nürnberg (ニュルンベルク) 周辺地域の東フランケン語と南フランケンゴ語を含む }

中部ドイツ語（音韻推移の影響が比較的少ない）

- ・中部ドイツのフランケン語 { Köln (ケルン) Trier (トリーア) の周辺部の中部フランケン語とヴォルムス、Mainz (マインツ) Speyer (シュパイヤー) 周辺の地域のラインフランケン語を含む }
- ・チューリンゲン語

低地ドイツ語（音韻推移の影響を全く受けなかった、受けていても散発的）

- ・低ザクセン語

こうしてドイツ語は空間的には高低両方言群に分けられ、またそれは時の流れに沿って古、中、新の 3 時期に区別される。確かにドイツ語はその源をこの 5 ~ 7 世紀における音韻推移に発している。しかしドイツ語、もとよりドイツというひとつの統一体としての意識は決してこの音韻推移と共に発生したわけではない。むしろこの音韻推移はゲルマン語としての統一を引き裂いたことになる。両方言群はこの音韻推移以降、標準語による国語の統一、ひいては民族、国民統一の意識の成立まで終始ある程度の対立関係を維持し、中世の終わりから近世の始めにかけては終局的分離の気運をはらんでいたとさえ見ることができる。このような状況の中でルターはすでに存在していたドイツ語の発達傾向に拍車

をかけ、これを急激に進展させ現代標準語の基礎を築いたのである。標準語による国語の統一はドイツの場合、実にドイツという統一そのものの不可欠な基盤であった。

ルターの聖書ドイツ語訳

ルターは低地ドイツ語と並んで東中部ドイツ語とよばれる方言群に属する地域で若い頃を過ごしている。この地域の人々は極めて多彩な方言を持ち、互いに言葉が通じないことも珍しくなかったため、必要に応じて15世紀までにこの地で高地ドイツ語の性格を基盤とした通用語、又は通用方言が成立した。当時の名称として Kursächsisch と呼ばれるものである。また彼が哲学、神学の講義を行ったヴィッテンベルク、エルフルトは Kursächsisch-Thüringisch の圏内であった。その後彼の活動の拠点は死の直前までヴィッテンベルクにあったので、言語的には Kursächsisch-Thüringisch の通用語として間違いない。方言性の少ない、したがって誰にでも受け入れやすいこの通用語は官庁、法律用語として重宝され、出版に用いられて急速に周囲の土地に普及していった。

ルターの言語的活動として刊行されたものは1515～16年頃に始まり、死の前年まで数百を数える。聖書のドイツ語訳は新約が21年、旧約は一部が23年、完訳が34年に刊行された。聖書のドイツ語訳はルターの宗教的業績の筆頭に数えられるべきものである。ルターはそれ以前の翻訳とは異なり、初めて

Griechisch (ギリシア語) の原典に立ち返って訳業を遂行した。彼は当時すでに存在した Kursächsisch という通用語を用いて、話し言葉の要素を多く取り入れた言語形式を採用した。ルター以外にも聖書の独訳はあったが、聖書の言葉をこれほど生き生きとさせたものは彼以前にない。ルターは翻訳に際し、民衆の話している言葉のうちに見出した豊かな表現力を持っている言い回しの中から、自分の目的にかなった有効なものを選び出してそれらを多用した。1530 年、ルターは『通訳についての回覧文』の中で彼が翻訳の際に注意した次のようなモットーを明らかにしている。

man mus die mutter jhm hause (家の中の母に聞きなさい) / die kinder auff der gassen (路地裏の子供たちに聞きなさい) / den gemeinen ma auff dem marckt drumb fragen (市場で低俗な男に物を聞きなさい) / vn den selbige auff das maul sehen (そして彼らの口を見なさい) / wie sie reden (彼らがどのように話しているか) / vud darnach dolmetzshen. (そして彼らが話すように通訳しなさい。)

また翻訳の努力は一回限りで終わるものではなかった。日常の用語を用いて民衆の胸に端的に訴えるような表現を求め、一個の訳語を求めて何日も苦悩した。そしてその用語と表現は版の改まると共に改訂されていった。

このようにしてなされた翻訳は極めて大きな反響を生み、必然的に彼の信奉者と敵対者の区別なくどちらの側でも大きな成果を挙げた。ルターの聖書は当時としてはまさに驚くほどの売行きを見せた。しかも著作権のない当時のことであるから直ちに新教各地で勝手に複製され、版を重ねた。翻訳聖書が驚くべき盛況を見せた背景には、第一に活版印刷が発明されたこと、第二に啓蒙的宗

教書を中心として一般に読書という新しい習慣がすでに根付いていたことが挙げられる。ルターの翻訳聖書の普及は、同時に彼の用いた言語の普及でもあった。ルターはそこへ宗教改革という爆弾を投げつけ世間の注目を一身に集めた結果、そのようにして全ドイツ語域に行き渡った彼の言語を元にして統一的文語を持ちたいという要望が全国的に、かつ意識的に取り上げられ、その注目と要望とが伴って今日の標準語が形成されるに至ったのである。このような事情がきっかけで結局ルターの用いた言語、つまり今日の Obersächsisch-Thüringisch（オーバーザクセン＝チューリンゲン方言）が標準語の基盤となった。

近代ドイツ語の形成に与えた影響

ドイツ語史におけるルターの役割、つまり新高地ドイツ語の形成に対する彼の貢献は比類のないほど重要である。しかし我々がルターとドイツ語の関係を考えるとき、時代が移ると共にそのマイナス面は次第に姿を消し忘れ去られようとしている。ルターが目指し、かつ獲得したものは社会規則としての新しいドイツ語を作り出すということではなく、当時すでに存在していた Kursächsisch という通用語を用いて、いかにしてこれに文語としての表現能力を発揮させるかということだった。その際注意すべきことは、宗教改革者ルターは当時においては全ドイツをカトリックとプロテスタントの2大陣営に分断し、それに伴ってドイツ語をも南北に対立せしめたにすぎなかったという事情であ

る。我々はこのマイナス面においても当時における影響を十分に評価しなくてはならない。

ルターのドイツ語に与えた影響は文法領域におけるものよりむしろ文体の領域、とりわけ語彙の発達という面で顕著であった。ルターは極端に情熱的な性格の人で、同志に対しては喜悅、信賴として、敵に対しては憎悪として彼の情熱は火の如く激しく燃え上がった。他方論争家として生涯の大半を論戦に費やした彼は、教会から破門され帝国追放刑にあって以後において、論敵に対する攻撃は徐々に激しさを加え、今日の我々を唾然とさせるほどの憎悪をこめた罵りと嘲弄が見られる。彼の優れた表現力はそれが正に優れたものであっただけに深く相手の心をえぐる鋭利な表現となり、当時のドイツ言語社会に対してひたすらマイナスとして働くことになる。ドイツ言語社会はこのような宗教改革論争によって悪化の一途を辿り、ドイツの最も荒廃した状態を作り出すことになった。もちろんこれはルター1人の責任ではないが、彼のあまりにも痛烈な罵りが互いの憎悪を深めたことも事実である。

こうした状況を打開するためにその後2世紀間、標準語運動の形でドイツ語の形態と内容に美しさと高貴さを取り戻し、さらにそれを進展させようとする運動が始まった。一方では作家の努力によって現実の模範的ドイツ文として、他方では文法家の努力によって規範文法として少しずつ整理されていった。こ

うした文法家は18世紀に入るまでルターの言語を文語として受け入れた土地の出身者が多かったので、この言語はなおさら標準語の基盤として揺るがないものになった。18世紀には入って世情が収まるにつれて標準語による国語統一もようやく軌道に乗り、標準語自体も今日のそれとはあまり変わらない形へと固まってきた。Preußen(プロイセン)の興起に伴う一般文化の興隆と共に Goethe(ゲーテ)、Schiller(シラー)をはじめとする作家たちは、この標準語を駆使して新しいドイツ語の表現能力を最大限に発揮した。その際現代の標準語は高地ドイツ語方言群の音韻、語形などを基盤として検討、批判、議論の末にいわば人為的に作りだされたものであって、自然に発生、発達した方言としての言語と異なる特殊な事情を有することに注意したい。

以上のような標準語成立の歴史はドイツの精神的、文化的統一を象徴するものであり、また統一それ自身でもある。方言の細分化状態はドイツの政治的細分の反映でもあった。ドイツにおける標準語の歴史は一面において政治的統一を求める念願であるとともに、ドイツ精神の確立、発展を求める念願の表れでもあった。その中でルターの持つ歴史的意義が極めて重要なことは上記の通り明らかである。ドイツ統一の意識は国語の統一を待ってはじめて現実のものとなったといえよう。

4. 今日のルターに対する評価

過去4世紀にわたって西欧文化に多大な影響を与えてきた偉大な宗教改革者マルティン・ルターの人物、思想を深く理解し、彼をどのように評価すべきかという問題は非常に困難を極める。なぜなら彼の残した業績はあまりにも多く、彼をどの側面から評価するかによってその答えは変わってくるからだ。欧米の卓越したルター研究者の間においてさえその立場によって意見の一致を見ることができないのが現状である。ルターは生涯を通じて約450冊の著書と論文を書き、約3000回の説教を行ない、2600通の手紙を書いたといわれ、過去数世紀にわたってルターの資料が探され検討されてきた。今日のルター研究はその学問的進歩によってルター文献学、ルターの歴史、ルター神学の3つの領域に分けられる。もちろんこれらの領域は相互に深い関連を持つものであって他の領域と切り離して研究されるべきものではないが、そのような研究の努力の結果マルティン・ルターという全ヨーロッパに信仰的、思想的、社会的嵐を巻き起こした歴史上の人物に歩み寄ることができるのだ。

ルター解釈の代表的なものは、キリスト教との関係においてプロテスタントの立場からは、ルターは教権制度によって歪められた使徒的教理をよみがえらせた「主の預言者」として、また偉大な宗教改革者として尊敬されてきた。他方カトリックの立場からは、一般には当時の教会の墮落を認めつつも統一せ

る教会を破壊した「悪魔の子」として非難されてきた。ドイツ文化との関係では、一方では帝国の政治的統一がますます失われていく時期の中で、聖書のドイツ語訳は近代ドイツ語の形成に大きな影響を与え、かつドイツ国民に内的精神統一、すなわちドイツ意識、ドイツ精神性を与えた偉大な国民的英雄として高く評価されてきた。また聖書を自由に研究する姿勢、自由な意見と思想も持つ姿勢を生涯貫いた彼は、精神の自由を獲得するまでには至らなかったが、後にそれを可能にした。少なくともその意味では、ルターは宗教改革を推し進めていくうちに、いつのまにかその枠組みを越えて偉大な功績を残したといえよう。また他方では「諸侯の奴隷」として農民戦争の弾圧に加担したドイツの自由に対する最も危険にして、かつ最もいとわしき敵として描かれている。

なぜルターはそのように様々に理解され、評価されるのであろうか。それは宗教改革が歴史の上においてもキリスト教会にとっても画期的な事件であったこと、ルターの改革思想の特殊性、つまりあらゆる外的制度（政治的、社会的制度など）に関係なく福音主義の立場から一貫して主張されたこと、ルターの信仰がキリスト者に対して時代を超えるものを持っていたことなどと併に当時の社会の複雑な諸事情に基づくものであることを忘れてはならない。なぜならルターもまた彼の「時代の子」であり、具体的な歴史的瞬間に世界を根底からくつがえし新しいものを形成したのであって、彼の歴史的業績は当時の複雑

な社会情勢などの関連においてのみ意味深きものとなるからである。そうすることによって宗教改革のもつ歴史的意義が明らかにされ、現代のドイツ文化を支えている基盤や国民性などといったものを把握できるのであろう。我々は今日のような激動する社会の中でルターの生涯と思想から時代を超越した何らかの「永遠なるもの」を学びとることができるのではないか。

Martin Luther

1483 wurde Martin Luther in Eisleben geboren. Luther, der Doktor der Theologie in Wittenberg war, problematisierte Ablassbriefe, die die römische Kirche damals verkaufte. Er wünschte eine theologische Disputation und formulierte 1517 seine Bedenken in den 95 Thesen. Das war der Beginn der Reformation. Luther wurde von der römischen Kirche mit dem Bann belegt, aber er blieb auf Lebenszeit bei seiner Behauptung. Die Übersetzung der Bibel ins Deutsche, die einen Teil der Reformation darstellte, ist auch eins seiner großen Verdienste. Bis er 1546 in seiner Geburtsstadt Eisleben starb, war das Leben Luthers ein unendlicher Kampf mit der römische Kirche.

“ Die Rettung der Seele sind nicht die Verdienste, sondern nur das Evangelium Christi. ” Das ist der Gedanke Martin Luthers. Die Reformation verneinte nicht die römische Kirche und schaffte kein neues Christentum. Luther führte einen geistigen Kampf, um Seelenruhe zu erlangen, dadurch gewann er die Wahrheit des Evangeliums, die die damalige Kirche verlor. Nicht als religiöser Kritiker fand Luther dieses Evangelium, sondern ein neues Verständnis führte ihn zur Reformation. Er dachte als Theologe über die Macht der Bibel und die Kirche, den Glaube und das Werk nach, und er brachte als Reformator seine Verständnisse und Handlungen vorwärts. Der Gedanke Luthers wurde von den Fürsten unterstützt, die gegen den Papst und den Kaiser waren,

und bald wurde er ein starker Führer, und er verursachte die geistige und soziale Revolution in Europa. Aber das war auch ein Anfang der deutschen Tragödie. Während der sich schnell entwickelnden Reformation und des Bauernkriegs wurden seine Ideen als Werkzeug der Politik benutzt. Danach nahm die deutsche Geschichte den Weg der Machtkämpfe und Trennungen.

Es ist sehr schwierig, Luther einzuschätzen. Weil seine Verdienste zu umfangreich sind, ändert sich die Antwort je nachdem, welche Seite von ihm man bewertet. Der Sinn hinsichtlich der deutschen Nation und der deutschen Kultur ist, dass Luther einen Einfluß auf die Ausbildung des heutigen Deutsch ausübte, und er gab der deutschen Nation die geistige Einheit. Er machte in Deutschland sogar geistige Freiheiten möglich. In diesem Sinne brachte er die Reformation vorwärts und erwarb sich über diesen Rahmen hinaus große Verdienste. Aber andererseits wird Luther als eine gefährliche Person eingeschätzt, als ein Sklave der Fürsten, der an der Unterdrückung des Bauernkriegs teilnahm.

Warum wird Luther unterschiedlich verstanden und bewertet? Die Antworten sind, dass die Reformation ein besonders Ereignis in der Geschichte und für das Christentum war, dass ein komplizierter politischer Zustand der damaligen Gesellschaft vorlag, dass Luthers Ideen etwas Besonderes waren, und dass er die unabänderliche Wahrheit hatte,

als die Zeiten sich änderten. Wir können in der heutigen unruhigen Gesellschaft aus seinem Leben und seinen Ideen etwas Ewiges lernen.

参考文献：

フランツ・ラウ (1966):「ルター論」. 東京：聖文舎

小牧 治 / 泉谷周三郎 (1970):「ルター」. 東京：清水書院

倉松 功 (1973):「ルター、ミュンツァー、カールシュタット」. 東京：聖文舎

オリヴィエ・クリスタン (1998):「宗教改革」. 大阪：創元社

小島公一郎 (1964):「ドイツ語史」. 東京：大学書林

ヨアヒム・シルト (1999):「ドイツ語の歴史」. 東京：大修館書店

野上 毅 (1991):「世界の歴史」. 東京：毎日新聞社

江上波夫/山本達郎/林健太郎/成瀬治 (1997):「詳説世界史」. 東京：山川出版社

濱川祥枝 (2000):「クラウン独和辞典」. 東京：三省堂

<http://www.wittenberg.de/seiten/personen/luther.html> (2002/12/17)

<http://www.geocities.com/Vienna/1667/luther.htm> (2002/12/19)